

かんで、子どもの経験範囲を広く豊かにし、子どもの自然に対する愛情をすくすくと伸ばすように努め、教師は常に子どもと共に遊び、子どもの発見について共に驚き、年齢相応の最も適した活動、ねらい、指導方法など研究していきたいと考えている。

五才児と「自然」

村石京子

五才児の級を受けもった一年をふりかえってみて、六領域の中で何をどのように扱って過ごしてきたらうか、特に「自然」の項としては何をやってきたかを考えてみる。今まで数多くくり返されているように、六領域といっても幼児の生活自体種々な要素が混然としており、一つ一つが分離独立した形のものでないことはいうまでもない。更にまた「自然」に関しては特に将来の理科の教科との連関はあることはもちろんだが、現在はそのを意識せずあそびを通してふれていきながら身近にあるものを細く観察し、興味をもち、

より深く知りたいという心をいだかせることが大切であると思いつながら。

〇 一 学期

桜の花が満開となりチューリップのつぼみもやわらかくふくらむこの時期には、園の庭には小さな蝶が花を尋ねてひらひらととんでいる。すでに一年または二年の園の生活経験をもつ五才児は、園の庭を我が家の庭と同じように親しみ探索している。目ざとく蝶を見つけた子どもたちは何とかがとりたいたいものと苦心しているが、蝶も彼らよりも身軽くてなかなかとれない。子どもたちは道具の必要性を思いついた。「先生、ちょうちょうとりのあみない?」「明日 買って来てよ」と教師に頼んで庭であそびだしたが、やはり目の前でひらひらととぶ蝶への誘いは明日へのばすことができない。「あみつくるから布ちょうだい」と次の課程へ進む。「それじゃ手伝ってあげるわね」と教師と子どもたちと共同作業でありぎれと竹の棒で手製のあみができた。セロテープやセメダインを一ぱいつけてできたちょうちょうとりのあみにいけどられた蝶は、早速これも手製のセロファン張りの箱に入れられた。やがて幾つかあみにかかると今

度はとった蝶の名前を調べる仕事はじまつた。もんしろちょう・もんきちょう・しじみちょう・くろあげは、など知っているよと教えているもの、図鑑で調べるよというもの、それぞれの興味の深度と態度が知れるようなおもしろい場面が展開されるのであった。

五月下旬頃郊外へ遠足に行く。現地解散であり親子いっしょであるので、ちよつと足場のばしてという思いの人達が多摩川べりまで行ったらしい。翌日「昨日みんなでとったの」とめだかとかどじょうをびんに入れて持参した子どもがいるので部屋で飼うことにする。めだかは気持よきそうにすいすいと泳ぎまわっているけれど、どじょうの方は泥の中がこいしらしく水の濁りの中へ身をかくすようにしてじっとしている。それをとるとき活躍したであろう子どもたちは「何を食べさせたらいかな」とえきを心配している。それからひきつづいて、おたまじゃくし、かえりなどが日曜の翌日というと続々と登場するのであった。そして子どもたちは机のまわりでそれらを見つめながらうたうたのであった。「……どじょうこだのふなっこだの春になつたと思うべな」めだかの学校は川の中……」

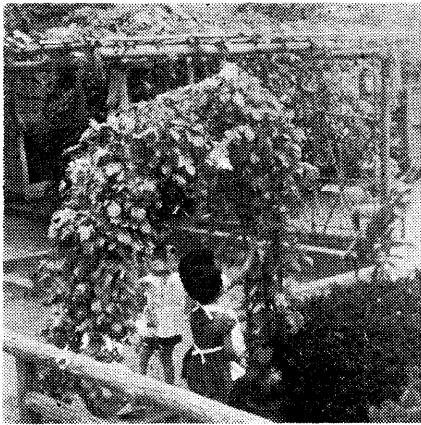
「くろいくろいおたまじゃくし……」などと。それは歌というより、小さな友だちに対する話しかけのことばと解釈することが当てているのであろう。

八十八夜も過ぎて幾日かという頃、朝顔のたねまきをした。これは一人で一鉢ずつ自分の鉢をきめて育て、たねをまいてから芽を出し、やがて花が咲いてまたたねが実るまでを継続観察するのである。自分の名前のついた鉢から芽が出て来たときの喜びは大きかった。毎日毎日せっせと水をやり「もうこのくらい大きくなった」とか「はっぱが何枚になった」とか報告がある。こうして夏を迎えるまで大事に育てられた朝顔の鉢は、夏休みに家にもって行って花を楽しむのである。今年は花の輪は小さかったが数はとてもたくさん咲いたそうである。昨日は細いつぼみであった朝顔が朝起きてみるとぱっと開いているのも、自分が育てたという気持があると喜びは一おのようであった。

○ 二期

秋の初めは夏に咲いた花が実をむすび、たねとりをよくした。更に九月、十月の虫とりは一学期のちようちよとりからまた躍進して

いる。むし、むし、と虫とりにあけくれた毎日であった。ばった・こおろぎ・かまきり・ちょう・とんぼ・かたつむり、種々つままえられては箱に分類して飼われている。昆虫への知識欲旺盛な子どもは、ばったの種類を調べて自分でつくった小さなノートにかきこんで、それを片手にばっ



たねとりしまししょう



こんな大きなおいもがほれたよ

たどりである。ある日、こんなことがあった。「今までと違う虫みつけた、調べよう」と騒いでいるグループに顔を出すとびっくりしてしまった。どこでつかまえて来たのか、近頃名前をよくきくごきぶりだったからである。秋も深くなると庭の樹木の葉が美しく色づいてくる。それを拾い集めてきれいに洗ってままごに使用したり、いろいろ並べては模様あそびをしたりすることも一しきり盛であった。

秋の遠足は楽しかった。いもほりに行ったのは親子共々はじめてという人が殆んどである。大きなきつまいもがぞくぞくと地面から



掘りあげられるのに、目はまるくなり、歓声は次々とあがるのであった。このいもほりの他に年長組だけで動物園にも行った。子ども動物園で園内に放しがいになってるたくさんいやぎ・ぶた・かんがるー、その他を相手にだいたり、えさをやったり、一しよに走りまわったりした喜びの一日であった。この日のあと幼稚園にいるうさぎやモルモットへの愛

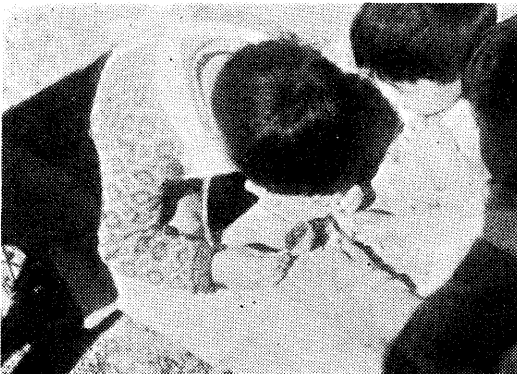
着も一だんと強まり、よく世話したがるようになったことを思うと本当によい経験であったと思うのである。

○ 三 学 期

虫めがねを幾つか子どもたちに使わせてみる。珍らしがって何でもかでものぞいてみているので、なかなかみる番がまわってこない程である。いつだったか、おべんどのサラダナを「これにはよく回虫のたまごがいるんだよ」と言い出して、「お母様がきれいに洗って下さったから大丈夫」といくら説得してもきかず、とうとう自分たちで虫めがねで仔細に点検したときには笑いがこみあげてしまった。虫めがねの実験は更に続けられた。きつと上の学校にいる兄にでも教わったのであるが、パラピン紙をほしいというので与えると、それに黒のクレパスをぬって太陽光線を虫めがねを通して焦点化すると黒い部分は燃え出す。これをやってみなに見せている。「僕もやってみる」「私も」とこれはとてもはやった。そして「太陽の原子エネルギーを吸収する機械をつくらう」と箱をたくさん組み合わせた不思議な機械もできあがった。私も学校時代同じようなことを授業中に詳しい説

明とともにやった経験があるが、子どもは原理は知らないが「うまく光を小さくしてその中心をつくってそれを黒のところにあてるのだよ」と友だち同志教えあっているのを見て、こうした強い興味が将来の科学性をどう培かっていくのだろうと思うのであった。

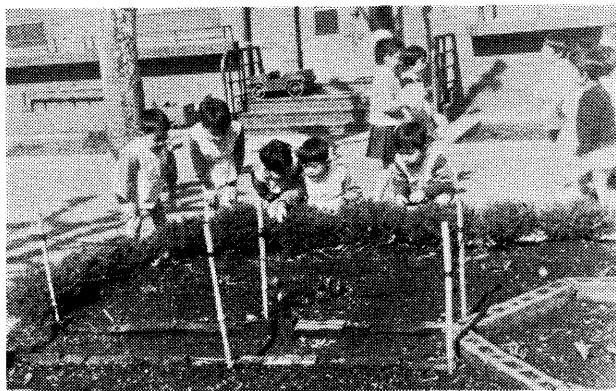
二月の寒さの続いた頃、テレビで雪と氷の話をやったことがある。それをみたあとで氷をつくらうということになった。『バケツに水



虫めがねでしらべよう

をあまりたくさん入れないで」というテレビの中のことを覚えていて教師の代わりに注意している子どももいる。男と女のグループに別れて各々バケツをもって寒い場所探しとなった。山へ行ったり木のかげにおいたりいろいろ苦心の末、女児のグループは物置の石べいよりのすみに、男児の方は遊戯室のはずれのへいに沿った空地においた。これは園の庭のはずれとはずれに当る。そして翌日を期待しながら家路についた。翌朝はみんな「氷できた？」とききながら部屋に来る。「みんなで見に行きましょう」とぞろぞろと行ってみると、物置のわきのバケツにはうすい氷はっていた。「わあ、できている できている」「僕たちの方は？」と勇みたって走っていった数人が失望した顔でもどって来た。「あのねー 日が当たってるの」「ぜんぜん だめだ」。いそいで行くと、なるほどバケツには朝の光がさしかけていた。因みに昨日は曇で日はさしていなかったのである。そして「もっと寒い場所さがそう」というがんばりやと「あの物置のある方が北でこっちは東だね。北は寒いから氷ができたんだね。先生」と知識的問題解決型とがこの場合もみられるので

芽が出てきたよ



あった。だんだん春が近づいてくると十月から育てていた水栽培のヒヤヒンスが急激に伸びはじめ、やがて花が開いた。一方の庭の花だんじうえた球根にも芽が出はじめた。「水栽培の方が早く花が咲くのね」「きつとお部屋が暖かいからね」「水がたくさんあるからよ」な

どと種々な疑問や解釈がでた。そして雑草をぬいて来て土をいれた箱とビニールの袋に水を入れた水栽培の比較実験を自分たちで試みはじめたのもこの頃のことであった。

××××××××

思い出すままにここ一年の生活の中から書きつらねてきたが、しかしまだまだ書き続けられつけない。「自然」の領域のことは初めに書いたようにとりたてて意識して指導はしていないが、しかし折にふれことあることに日常接しているのが五才児の「自然」なのである。そしてその経験は他の領域即ち、音楽リズム・絵画製作・言語・健康・社会、全てへと直接結びついていることに思いを深くするのである。幼稚園の生活即ちあそび自体の中にどんなに数多くそれが含まれているか、目にみえ、手にふれるもの、彼らの興味あるところ全て「自然」に関したものである。この点に着眼し、教師は直接経験をともなうよう豊かな環境設定に留意するとともに、その興味の伸張と疑問の探究に幼児と行動をともにしていくのが、将来の科学性を育くむ基本としての現在の「自然」のあり方なのであると考える。